

ナラティブ・アプローチが開く、新たな自己物語

坂本英樹（どもる子どもの親、教員、NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト）

ナラティブ・アプローチが依拠するのは「言葉は世界をつくる」という社会構成主義の哲学である。私たちがどういう言葉、用語を使ってある現象を言い表そうとするのか、それに従って現実が構成されると考えるのだ。吃音症、吃症状という言葉で吃音から受ける影響と悩みを語る人は、その症状を緩和する、治すために検査と診断に基づく治療が必要と考え、医療の枠組みで吃音に対処しようとするから、医師などの専門家の指導を仰ぐことになるだろう。

一方、私たちは「吃音とともに豊かに生きる」、「吃音肯定」という言葉で吃音を考えている。私たちの吃音へのアプローチは、こうした言葉、言説が紡がれているコミュニティを通して、自分の吃音と向き合うというものだ。ことばの教室、大阪吃音教室、吃音親子サマーキャンプはそうしたコミュニティであると位置づけることができる。こうした場でのコミュニケーション、対話の進め方の方法がナラティブ・アプローチである。

ナラティブ・アプローチはオーストラリアの精神科ソーシャルワーカーのマイケル・ホワイトとニュージーランドの文化人類学者ディヴィッド・エプストンが 1980 年代後半に始めたものだ。ナラティブとは語り、物語という意味だが、このアプローチは「問題と人を分ける」、「問題が問題なのだ」という哲学をもつ。どもる私という人や吃音自体が問題なのではない。どもることを情けないと感じ、どもる自分は就職できないと考え、どもると会話のテンポを乱すから、友だちの輪に入らないというような行動、つまり、吃音から受けるマイナスの影響こそが問題なのだ考えるのだ。

ナラティブ・アプローチはこうしたマイナスの影響を見える化、形にして外から眺めること、外在化することを技法の一つとしている。言語関係図や吃音キャラクターなどは、ことばの教室やセルフヘルプ・グループで取り組めるその格好の教材だ。それを一緒に製作し、それをもとに自身の課題や思い、苦労を言語化し、語り合うことで同じように吃音に悩んでいるといっても、その悩み方は人それぞれ、受ける影響も違うことを知るだろう。それは新鮮な驚きであり、知的好奇心をかきたてられる、真摯に相手の話を聞こうという姿勢を生む体験となるはずだ。

このような対話における態度をナラティブ・アプローチでは「無知の姿勢」とよぶ。教員や言語聴覚士のような何らかの専門性をもつ職種にあるものは、自身のもつ既知の知識に当てはめて、相手の話を儀礼的に聞きがちではないだろうか。それは「どもるから～できない」というストーリー、問題の染み付いたドミナント・ストーリー（支配的な物語）の単なる確認作業、強化でしかない。どもる子どもや成人から、そこに収まりきることのない例外的な出来事が語られたとしてもそれは焦点化されることなく、聞き流され、ドミナント・ストーリーに回収されてしまうだろう。第一、無知の姿勢に立たない相手に対して当事者は語るができるだろうか。対話が成立するだろうか。

無知の姿勢はドミナント・ストーリーから自由な例外的な出来事、ナラティブ・アプローチではそれを「ユニークな結果」とよぶが、それを見逃すことなく、発見し、キャッチする。大阪吃音教室に 10 年以上通う製造業に勤める M さんが、通い出した頃に職場での苦労を語ったことがあった。仕事で使う材料であるステンレスという言葉がどうしても言えなくて、「クロムとニッケルなどの合金」と言ってしまったと、どもってうまく言葉が出てこなかった失敗談、苦い体

験として語ったところ、その場は大爆笑に包まれた。Mさんはこの反応に一瞬きょんとしたが、参加者からの「見事なサバイバルだ」、「ユーモアで切り抜けるなんてすごい」等々のレスポンスにMさんの表情も笑顔に変わっていった。以来、Mさんはこのエピソードを自身の鉄板ネタ、ユーモアでサバイバルしているエピソードとして語っている。

ここで起きていることは、「どもってうまく言えなかった、失敗した」というドミナント・ストーリーから、「どもる自分をユーモアで支えている、サバイバルしている」というオルタナティブ・ストーリー（既存のものに代わる物語）への転換である。この経験の意味づけの変化、自己認識、自己語りの更新はMさんにドミナント・ストーリーの後景に隠れていて、見過ごしてしまっていた「どもりながらも〜できた」や吃音に支配されていない、自由なエピソードを発見させる力となった。ナラティブ・アプローチはこうした志向性をもった対話実践と位置づけることができる。

大阪吃音教室は共同の営みとして参加者の語りの中からオルタナティブ・ストーリーをとともに発見し、確認しあう場である。ナラティブ・アプローチではこれを共著者になるという。支配的で強力なストーリーに対抗するには、「吃音とともに豊かに生きる」新たなストーリー、アイデンティティをそれとして認めてくれる証人、仲間の存在が必要だ。ことばの教室の担当者の役割もここにあるだろう。私たちが「吃音を生きる子どもに同行する教師・言語聴覚士の会」と名乗る理由である。

さて、私を大阪吃音教室へと導いたのは、大学院生となった23歳になる娘である。小学5年の秋に「授業での音読ができない、読めるのに読めない」と涙目で訴え、毎晩のように浅い呼吸と苦しそうな表情で音読練習を始めた。「音読もできない、休んでいる隣の席の子の名前が言えない私は駄目な私だ」と言い出した時には親として焦りを感じた。娘に起きている現象が吃音とわかるまで少し時間がかかったが、その年の暮れに初めて私は大阪吃音教室に参加し、現在に至っている。

自分に起きている現象が得体の知れないものではなく、どもり、吃音という名前があること、治るものではないが考え方、向き合い方があり、それを実践しているグループがあると知ったことが、彼女の不安を軽減させたのだろう。3学期にはどもる状態は落ち着きを見せ、小学6年で初めて、吃音親子サマーキャンプに参加した。

後に知ったことだが、最初はキャンプへの参加に対して、私とは反対に乗り気ではなかったらしい。しかし、その後、クラブで忙しい中学2、3年を除き、高校卒業まで計5回の参加を重ねた。劇では生き活きと役を演じ、同年齢集団での話し合いが一番の楽しみだと話すようになった。年に一度会う仲間の語り彼女に大きな刺激を与えていたのだ。

コロナ禍での大学3、4回は代表を務めるサークル運営に苦勞をしていた。新聞に大学名が載る運動部以外の活動はなるべく認めたくないという大学側の意図なのだろう、詳細な感染防止マニュアルの提出が活動再開の条件とされた。何度も書き直し、疑問点を担当者に直接、またはメールで問い合わせ、交渉するうちに担当者の説明に齟齬があることを指摘するまでになり、逆にアドバイスを求められるようになった。「私には伝えるべきことがある」という思いがそうさせたのだろう。この力はゼミでの発表や教育実習にも活かされた。

こうした経験を経て娘は「私はどもるから、ゆっくりと丁寧に相手に伝えようと務めている。そのせいか話がわかりやすいと言われる。私は話すのが得意だ。これが私の強みだ」と語る。サマキャンの劇の練習で学んだ、からだの声を聴き、他者からの働きかけに促されて、それを声として発する竹内レッスンが自分の声を支える資源となっているという。言語実践を通して書き換えられ、更新されていく自己語りは、彼女のアイデンティティを形成し、未来を創造していくだろう。